

目次

はじめに・・・1

プログラム概要・・・2

プログラム内容・・・4

参加者感想文・・・16

石原紗和子 My story to Palestine

斉藤大喜 旅を終えて

高橋梓 パレスチナで、そしてアジアで。

巻末資料：英文でのプログラムスケジュール

はじめに

日本の YMCA、YWCA は、世界運動とのつながりの中で、パレスチナにおける正義と平和の実現を目指す現地の YMCA、YWCA の活動に大いに関心を持ち、長年にわたり連帯の働きを続けてきました。

特に、東エルサレム YMCA とパレスチナ YWCA 共同による Joint Advocacy Initiative (JAI) が行う「オリーブの木キャンペーン」に積極的に協力、参加し、同キャンペーンと関連して行われるオリーブ収穫およびオリーブ植樹プログラムに、2004 年以來ほぼ毎年参加者を派遣してきました。

在日本韓国 YMCA では、創立 100 周年（2006 年）を機に、東エルサレム YMCA とのパートナーシップ締結を目指した交流を開始し、日本 YMCA 同盟とともに JAI プログラムへの参加者派遣の国内主幹の務めを担っています。

2009 年 10 月に行われたオリーブ収穫プログラムには、東京 YMCA から 2 名、在日本韓国 YMCA から 1 名のユースボランティアリーダーが参加し、現地の人々および世界中から集った仲間たちと交流し、大いに学びを深めました。

この報告書には、そのときのスケジュールと参加者による感想文をまとめました。たいへん簡単なものではありませんが、今後パレスチナで行われるプログラムに参加する方々の参考になれば幸いです。

ガザではイスラエル軍による大規模攻撃後の復興が進まず、人々は大きな苦しみを負っています。和平への道のりは誠に困難を極めています。しかし、どれほど厳しい状況にあっても、「KEEP HOPE ALIVE」と唱え続け、決して希望を失うことなく懸命に生きているパレスチナの仲間たちのことを、私たちはこれからも忘れず、連帯のために何ができるのかを考え続け、そのことを実行していきたいと思えます。

今回の参加に当たり、様々な支援をいただきました日本 YMCA 同盟の島田茂総主事、また現地との連絡調整および諸準備を担当してくださった横山由利亜スタッフに心より感謝申し上げます。

2009 年オリーブ収穫プログラム
国内主幹 在日本韓国 YMCA
総主事 金 秀 男

◆プログラム概要 (JAI ウェブサイト <http://www.jai-pal.org/>より抜粋翻訳)



オリーブ収穫プログラムは東エルサレム YMCA とパレスチナ YWCA によって組織された Joint Advocacy Initiative (JAI) と Alternative Tourism Group (ATG) によって毎年秋に企画されています。オリーブ収穫の季節は短く、またパレスチナ人はイスラエル入植者やイスラエル軍兵士によって妨害や嫌がらせを受けています。それを防ぐために、私たちはインターナショナルを招き、パレスチナ人農家と共にオリーブ収穫

を行います。一週間のプログラムの中、「カルチュラル・イブニング」、レクチャーやプレゼンテーション、そして宗教的な場に訪れる機会も設けます。

第 6 回 2009 年度オリーブ収穫プログラム

● 期間 2009 年 10 月 17 日 (土) ~26 日 (月)

● 2009 年度プログラム内容

ベツレヘムの Beit Jala、Jaba'a、Al-Khader、Nahhalin、Al-Walaja、Wad Rahhal といった 15 の畑においてオリーブ収穫が行われた。

オリーブ収穫と共に、パレスチナ問題の発生やアパルトヘイト・ウォール建設の現状についてのプレゼンテーションが設けられた。



プレゼンテーション内容：

1. 「アパルトヘイト・ウォールとイスラエルの入植」(エルサレム応用調査研究所 Applied Research Institute Jerusalem (ARIJ))
2. 「エルサレムの入植地と破壊された住居のスタディツアー」(イスラエル家屋破壊反対委員会 Israeli Committee Against House Demolitions (ICAHD))
3. 「ヘブロンの特異な状況」(ヘブロン・リハビリテーション委員会 Hebron Rehabilitation Committee (HRC))
4. 「パレスチナ難民について」(パレスチナ人居住と難民のための BADIL 資料センター)

BADIL Resource Center for Palestinian Residency and Refugees' Rights)

また、オリーブ工場 (Olive press cooperative)、イブラヒムモスク (Ibrahimi Mosque)、アクサモスク (Aqsa Mosque)、聖墳墓教会 (Holy Sepulture Church in Jerusalem)、ベツレヘム聖誕教会 (Nativity Church) など、ベツレヘム、エルサレム、ヘブロン旧市街をめぐるツアーが行われた。

● 参加者

今年度は 100人以上の世界各地(18カ国以上)からのインターナショナルが参加した。参加者を3つのグループに分け、同じプログラムをずらしながら、それぞれプログラムをこなした。参加者はパレスチナについて直接話を聞き、現実を目撃することになり、そして社会的活動を通して農民の「KEEP HOPE ALIVE」を助けると共に、パレスチナでの社会的・文化的生活を楽しました。プログラム終了後、参加者の多くはベツレヘムにおいて二日間に渡り行われた「International Seminar on Economic Perspectives and Advocacy Strategies (国際セミナー：経済展望と弁護的な戦略)」(OPGAI、AIC 共催)に参加した。



世界各地から集まったインターナショナル達

◆プログラム内容

【10月16日～17日 出発からプログラム開始まで】

日本～ウィーン～テルアビブ～ゲストハウス到着、羊飼いの丘、オリエンテーション

10月16日、成田空港10時55分発のオーストリア航空（OS052便）に乗り、ウィーン



へと向かう。普段の旅行とは多少違うせいか、期待感と共に緊張感が漂う。成田空港では普段通りの出発の段取りで変わった事は無かった。

機内では睡眠を取ったり新聞を読んだり、各自時間を潰す（約13時間）。

ウィーンには現地時間の15時55分着。現地発の便を待つ数時間、空港の中を歩き回り、疲れたところで食事。20時25分発のOS859便に乗り、イスラエルのテルアビブ空港に向かう。出発の際のセキュリティチェックはそこまで厳しいものではなかった。



現地時間23時55分、テルアビブにあるベン・グリオン空港着。近代的な空港である。ベン・グリオン空港での入国チェックは厳しいが、同行した石原さんが得意の英語で、私たちが日本人であり「普通の観光で来た」という主張を突き通す事によって入国審査を各5分ほどで済ませます。現地で合流する予定であったポーランドからのもう1人のメンバーと合流できないまま、支配されていたタクシー（バンタイプ）に乗りベン・グリオン空港を出る。夜の街を猛スピードで走り、30分程でイスラエルとパレスチナを分ける分離壁に到着。イスラエル兵のチェックを特に受けないまま壁の門が開きパレスチナ側へ入る。そうすると急に街の雰囲気が変わり、もの寂しい雰囲気に変わる。20分程入り組んだ道を走り、ベツレヘムにあるゲストハウスへ到着。周りには高い建物は何もなく、街灯も少ないせいか暗い。特に暑くも寒くも無い気候だった。ゲストハウスの受付には1人の少年がいて、私たちが待っていた。彼は私たちに部屋を案内してくれた。そのまま就寝。



（写真上から：成田空港のオーストリア便、ウィーン空港の出発口、ベン・グリオン空港ロビー）

10月17日、7時起床。パレスチナでは初めての朝。真っ暗だった昨夜とは印象が違う。空港からゲストハウスまでほぼストレートに来たので未だにパレスチナにいるという実感



が無い。朝食はナンの様なものとトマト、キュウリ、ゆで卵、ヨーグルト、コーヒーなど。外に出ると、遠くに街が見えた。中東というイメージそのままだった。

9時半頃、同じゲストハウスに泊まっていたイギリスから来たグループと共に羊飼いの丘 (Shepherd's Field) に向かう。建物は全て石で出来ていて、木造建築は無い。空気はドライで暑い心地良くジメジメして

いない。30分程歩いて羊飼いの丘に到着。イギリス人グループと共にミサへ参加。聖歌「Bethlehem」を歌っていた。丘からは遠くに黒っぽい羊が見えた。

12時頃、羊飼いの丘の目の前にあるお土産屋さんをお邪魔する。その後羊飼いの丘からゲストハウスに戻る途中にあるテント (レストラン) で昼食を取る。1人16USドル前後。パレスチナのタイベビールを初めて飲む。食後に飲んだコーヒーからはハーブの香りがした。

18時からオリーブピッキングのミーティング。参加者は約100名。それを3グループに分け、私たちが宿泊したゲストハウスと、別のもう2か所でミーティングが行われた。同じゲストハウスに他のメンバーが宿泊していた事を初めて知った。ほぼ全ての参加者がヨーロッパからの人で、アジアから来た人は私たち3人と京都から来た1人の計4人しかいなかった。簡単に自己紹介を済ませ、今後のスケジュール説明をイブラヒムさん (JAI) がしてくれた。ボランティアスタッフはダニエル (スイス)、マルタ (ポーランド)、クリステル (オランダ) の3人で、数か月パレスチナに滞在すると言っていた。

20時頃、ポリティカル・カフェ (教会の側にある) まで少し歩き出席。世界中の人たちで溢れかえっていた。バーの様な場所ではビールを売っていて皆がお酒を片手に話をしていった。一方、広い部屋ではカンファレンスが開かれており、大学の教授が講演をしていた。彼は私たちに非常に友好的で、仲良くしてくれた。壁には15枚近くの写真が飾られており、どれもがパレスチナの現状をストレートに表現する様なものであった。22時頃、ゲストハウスに戻り、1日が終わる。(斉藤)

(写真上から：羊飼いの丘から見える景色、ゲストハウスでのミーティング、ポリティカル・カフェでのカンファレンス)



【10月18日 プログラム1日目】

オリーブ収穫 (Beit Jala)、オリーブ工場 (The Cooperative Society for Pressing Olives) 見学、アイダ難民キャンプ (Lajee Center in Ayda Refugee Camp) 訪問



いよいよオリーブ収穫プログラムが始まった。7時に起床し朝食。8時にバスでオリーブ畑へ移動（この生活パターンが1週間続く）。収穫に使う大きなバケツ、ビニールシート、脚立は JAI が準備しており、参加者が畑まで運ぶ。8時半、いよいよ収穫作業開始。私たちはグループの中でも若いメンバーだったので、脚立を使ったり、木に登ったりして上の方に実ったオリーブを摘むことになった。オリーブ収穫ボランティアに参加したことのあるイギリスのおばさま達に、オリーブの摘み方を教わる。彼女達の目の良さ、行動力に驚かされた。収穫自体は簡単なのだが、枝葉の中に実る小さな実を見つけるのはとても難しいのだ。別の畑に移動すると、初めて顔を合わせるメンバーが何人かいた（ロンドン、オランダからの参加者）。今年のオリーブ収穫は参加者が多く、3つのグループに分けられており、ここで新たに会った人々を加え私たちのグループのメンバーがほぼ揃った（約20人前後）。収穫を終え、農家が用意してくれた昼食をいただく。この日のメニューはサフランライスにチキン、ヨーグルト、そして梨に似た味のパレスチナのリンゴ。山に広がるオリーブ畑を眺めながら昼食の時間を過ごす。後は3つの施設を見学した。まずオリーブ工場を訪れ、収穫したオリーブがオリーブオイルに加工される工程を見ることが出来た。そしてアイダ難民キャンプでは、Lagee Center (Lagee とはアラビア語で「難民」という意味) にてパレスチナ難民の発生と離散の現状についての話を聞き、センターが提供する写真の展示を見学。キャンプ内を歩くと、そこに住む子ども達や、家を建てる住民に出会い、生活の一面に触れることが出来た。またキャンプ内には様々なメッセージが書かれており、住民の出身地と共に「we will return」と書かれたものが印象的だった。その後、分断壁に挟まれ孤立したギフトショップ (Holy Star Gifts from Bethlehem) を訪れた。難民キャンプとギフトショップを訪れることで、パレスチナに来て初めて分断壁を目の当たりにした。



その後「聖誕教会」を訪れ、5時にメンバーが滞在するホテルに到着。私たちはホームステイ先へ移動。ホームステイ先のお父さん George は現在カルチャースクールのような所で先生をしており、お母さん Najla はゲストハウス経営の傍らパレスチナの伝統刺繍の仕事をしている。Azar、Tony という名の息子達は、二人ともイギリスへの留学を経て現在アイルランド在住だが、長男 Azar の結婚式があり二人とも家に戻ってきていた。この日はそのまま家で過ごし、就寝。(高橋) (写真 畑での昼食風景、オリーブ工場の少年達)

【10月19日 プログラム2日目】

Beit Jala/ Ayman のうち



「今日は、オリーブの畑に入れるかどうかわかりません。入るのに何時間もかかるかもしれないし、一日中待っても入れないかも。入れたとしてもパレスチナ人のイブラフム（JAIのスタッフ）だけはいれられないかもしれない。去年は2時間待ちました。みんな長い目で辛抱強くいきましょうね」朝のバスで、オランダ人スタッフのクリステルがそうアナウンスした。畑について目に入った光景は、やはり異様なものだった。溪谷に広がる縦に長い肥沃な畑。でもその頭上にそびえ立つのは、ずっしりとした柱の上に立つ立派な高速道路の陸橋だった。この高速道路は、エルサレムからパレスチナ内の入植地に向けて続いており、イスラエル人専用である。入植地に住

むイスラエルが、パレスチナの町中を通ること無く、エルサレムにいつでも行かれるように作られた。パレスチナ人が使えない、そして横断することも出来ないこの高速道路によって、多くの人の暮らしが分断され、ほんの5分ほどで行かれた隣近所にも、今は高速道路を避けるように迂回しないと行かれない。

この畑も、「安全」の名の下、パレスチナ人の農家の人々が所有している畑にも関わらず、イスラエル兵によって封鎖されている。入り口には大きなゲートが立てられ、イスラエル兵が常駐している。畑の所有者たちは、自分の家から畑に入るのに、イスラエルの許可証を持たなければならず、持たないものは入れない。インターナショナルがオリーブ収穫に参加することに意味の一つはここにある。第三者であり、イスラエル兵士が権力を振るいにくい相手が私たちボランティア。だから、この畑にボランティアが行くことで、パレスチナ人だけではほぼ99%入れない畑に入れる確率が高まる。もちろん100%ではないので、だからこそクリステルの朝のアナウンスがあった。ゲートを通って、畑に入れるか否かは、そこで警備をしている兵士の気分次第。幸運なことに、私たちはなにも待たずに、パレスチナ人スタッフ、農家の人々も全員がすんなり入ることが出来た。

順調に収穫も進み、農家の Ayman という青年もとても明るく楽しい時を一緒に過ごした。インターナショナルが収穫に加わることで、パレスチナ人を守る人柱のような役割、そして人手になることが出来る。本来、オリーブの収穫は、家族総出で行うのがパレスチナの文化だった。収穫の時期になるとおばあちゃんから子どもまで、みんながごはんを持って畑に出かけていき、若者が木にのぼり実を落とし、お年寄りが木下で実を広い集め、選別する。そうやって成り立ってきた文化、家族の団らんをもが、今は壊されている。お年寄りや子どもは、いつ兵士が来るかわからなかったり、入るのに危険にさらされる可能性のある畑には行きたがらず、徐々に家族の伝統行事は消えてしまった。それでも生活するために大切な



資源であるため、家族の中の働き手だけが畑に行くようになった。私たちインターナショナルが加わることで、安心し、お年寄りや子どもと一緒に畑に来ることが出来る。収穫の後は、Aymanのお母さんお手製のチキンとサラダのご飯を頂き、午後は Badil Resource Center for Palestinian Residency And Refugees Rights を訪問し、プレゼンテーションを聞いた。パレスチナ人の居住に関するトピックを、歴史とともに聞いた。中でも印象的だったことは、イスラエルがウェストバンク内の水の供給の制限策をとっており、ウェストバンク内では頻繁に水不足が起きる。しかしこれは資源の量の問題ではなく、イスラエルが嫌がらせとして供給しないだけであり、壁の外では多くのイスラエル人やイスラエルへの観光客が、リゾートホテルでプールに入ったりしている。また、壁が立てられ、土地がどんどん狭くなってきているウェストバンクでは、子どもは結婚しても、新しく家を建てる土地が無く、また外に出ることも出来ないため、大体が両親の家の2階に家を建てる。上に上にと積み上がる家々。中でもガザはそれが著しく、ガザは世界で一番人口密度が高い（押し固められている）場所である。また壁建設の際に、壁の外に位置してしまった家々は、イスラエル側に違法に立てられた家として見られ、取り壊しを迫られる。先祖代々その地に住んでいようとも、イスラエル側に認められていないとされれば、電気もガスも供給されず、地図からも消され、そしていつ取り壊されるかわからない恐怖の元、暮らすしか無い人々が多くいるという話を聞いた。（石原）



(写真：イスラエル兵によって突然壊されてしまった家の残骸)

【10月20日プログラム3日目】

エルサレム観光、ICAHD (The Israel Committee Against House Demolition)



7時起床、朝食を取り、ホームステイの家を出てサハラホテルまで歩く。8時、グループでバスに乗りエルサレムへと向かう。1時間もしないうちに壁に到着。バスの緑色のナンバープレートはパレスチナのバスを意味する。黄色のナンバープレートのものはエルサレムに入る事を許可されている。バスは簡単に壁を抜け、メンバーが下車。その後長い列に並びセキュリティチェックを受ける。中に入って初めて目にしたのが岩のドーム (Dome of the Rock) で、壁のタイルが非常に美しく、金色をしたドームが照り付ける太陽の日差しを一杯に受けて輝いていた。岩のドームをぐるっと周るかたちで歩き、そのままイエス・キリストの墓とされる場所に立つ聖墳墓教会に向かう。途中、路地の様な、商店街の様な細い道を20分程歩く。教会に入ってすぐの場所は、イエス・キリストの身体が埋葬のために準備された場所であると信じられている石物がり、人々がそれを触ったり祈りを捧げたりしていた。



13時ごろ、聖墳墓教会を出た私たちは再び入り組んだ細い路地を歩きそのままレストランへ向かう。パン、米、肉、野菜、フルーツなどがビュッフェ形式で置いてあり、非常に美味しかった。そのレストランのテラスで、日本語を偶然発見した。そこには「世界人類が平和でありますように」と書かれていた。自分たちが不安定な土地にいる事を再度実感した。

14時半頃、バスに乗って移動。15時頃、エルサレムの街を見渡せる丘にて「家屋破壊に反対するイスラエル委員会 ICAHD (The Israel Committee Against House Demolition :

<http://www.icahd.org/eng/>)」の職員の話聞く。彼はユダヤ人であり、政治的な話をしていた。同行した石原さん曰く「話の内容が言い訳がましい」と言っていた。私の英語力ではそこまで難しい話には追いつけなかった。その丘から見える景色は、まるでパノラマ写真の様にエルサレムの市街が広がり、水平線が丸かった。争いが絶えない場所とは思えないほど静かで、日差しは弱く若干涼しかった。

17時頃、バスに乗り分離壁を越えて1時間足らずでサハラホテルに到着。歩いてホームステイ先の家に帰る。夕食を取り、20時、ポリティカル・カフェに出向く。そこではクリステルがプレゼンをした。内容は「イスラエルに対してボイコットをしましょう。ヘブライ語の書かれた商品は買わないようにしましょう」というものだった。個人的なものになるが、私はここで1つの疑問を感じた。そこでビールを飲んで他のメンバーと世間話をしたりして23時帰宅。1日が終わり、就寝。(齊藤)

(写真上から：岩のドーム正面、聖墳墓教会内、レストランのテラスで発見した日本語)

【10月21日 プログラム4日目】

オリーブピッキング (Al Khader)、ARIJ (Peace from a geopolitical dimension by The Applied Research Institute Jerusalem)、Nativity Church

7時起床、朝食を取り、8時にサハラホテルからバスで移動。9時頃に Al Khader に到着し、脚立やビニールシート、バケツをバスから取り出し、それを畑まで運びオリーブピッキングを始める。天気は良好。日差しは強く、空気は乾燥している。そろそろオリーブピッキングの要領が掴めてくる。今日はカメラマンとリポーターが同行し、何人かがインタビューを受けていた。ひたすらオリーブを収穫し、13時に昼食。ご飯にジャガイモとオリーブと野菜などの炒め物をかけたどんぶりの様なもので非常に美味しかった。その後、バスに乗って移動。



14時過ぎ、ARIJ (The Applied Research Institute Jerusalem : <http://arij.org>) に到着。プレゼン「Peace from a geopolitical dimension」を聞く。ARIJ はパレスチナの人々が天

然資源などを研究、そして持続可能な開発、独立を促進するために 1990 年に設立された民間非営利組織で、その日はパレスチナ・イスラエルの土地や分離壁が詳細に記された地図を頂いた。その後、バスで再び移動。ベツレヘムに向かう。

15 時半頃、聖誕教会（Nativity Church）に到着。イエス・キリストが生まれたとされる場所で、イエスが最後に歩いたとされる悲しみの道がエルサレム（イスラエル側）にあるのに対し、この聖誕教会はパレスチナ側にある。外国人でごった返し、ここが聖地であるという事を再度認識する。日が沈みかけ、コーランが響き渡る。絵に描いた様な夕焼けの空に広がるコーランは、意味は理解出来なかったが今でも思い出せる程に美しい音色であった。18 時頃、いつもの様に帰宅し、1 日が終わる。（斉藤）

（写真上から：オリーブピッキング、聖誕教会、聖誕教会地下のイエスが生まれたとされる場所）



【10月22日 プログラム5日目】

Hebron 訪問



（写真 1）エルサレムやベツレヘムに比べて、イスラム教の人々、特にスカーフで頭部を覆った女性が街全体で目立った。これぞアラブの街！といった雰囲気を感じた。マーケットは活気に溢れて、大通りはタクシーやトラック所狭しと走っていた。

（写真 2）人でごった返す大通りから、細く長く続くマーケットの路地を進んでいくと、異様な光景が目に入った。両脇に店が並ぶ道の頭上に、金網が張り巡らされ、その上には、石やビン缶、壊れた電化製品や椅子などが乗っていた。



（写真 3、4）ヘブロンは、パレスチナ人とユダヤ人の対立が最も激しい地区の一つである。3000 人のパレスチナ人に対して、500 人のイスラエル人が住んでいる。しかしこの 500 人を守るために 2000 人の兵士がヘブロンの町中に常駐している。街の至る所がブロックされ、パレスチナ人は限られた区画で生活することを迫られている。道が突然封鎖され、壁の向こう側は、イスラエル人だけが通行することが許可されている。

街の中の至る所にチェックポイントが点在しており、ここを通る人は何を聞かれる訳でもないが、えも言われぬプレッシャーと緊張感が走る。子どもも女性もここを通り、マーケットや学校に行く。日

常が見張られている状態なこのヘブロンは美しいが、閉塞感でいっぱいだった。

イスラエル人とパレスチナ人が壁一枚を介して暮らしているヘブロンは、じわじわとパレスチナ人の自由と権利、そして家族と幸せに過ごす場所さえも奪われていることが顕著にわかる土地である。この日聞いた HRC (Hebron Rehabilitation Committee) での講演でも、迫ってくる恐怖やイスラエル側が出すパレスチナ人の自宅待機命令、突然の街の破壊や封鎖についての報告を聞いた。(石原)

【10月23日 プログラム6日目】終日オリーブ収穫 (Beit Eskaria)

7時に起床し、いつものように朝ご飯にサクサクのピタパン、ゆで卵、オリーブをいただき、8時にはオリーブ畑に向かった。この日は21日に行った畑 (Al Khader) の近くの Beit Eskaria にて終日オリーブ収穫。この日、石原さんをはじめグループの何人かはロイターのカメラマンと一緒にイスラエルの checkpoint に対するデモ(毎週金曜日決行)を見に行っていた。よってこの日のオリーブ収穫は、デモに行かなかったメンバーと農家の人々で行われた。



この日の収穫は、畑で行われた何気ない会話によって私にとって印象深いものとなった。デモに行った人たちは大丈夫かなあと、初日に仲良くなった在英パキスタン人の Nudrat と話しながらオリーブを摘んでいると、農家のおじいさんがミントの紅茶(「シャーイ・マ・ナナ」。アラビア語でシャーイはお茶、ナナがミントを意味する)を持ってきてくれた。そして Nudrat にアラビア語で話しかけてきた。彼女はムスリムで頭にスカーフを巻いているため、よくパレスチナ人と間違えられる。パレスチナ人じゃないです、パキスタン人なんですと英語で話すと、おじいさんはムスリムに会えて嬉しいと喜び、自由行動の日は是非私の家にいらしゃいと言った。微笑ましいなあと思っていると、急におじいさんはかつて畑で母親が虐殺されたことを語りだした。こんな静かな畑でなぜ、と想像することができない話だった。

その日の午後も、静かに過ぎていった。昼食はいつものように農家が用意してくれた。挽肉が乗ったパイがとてもおいしかった。午後オリーブ収穫。畑の子ども達も手伝ってくれた。畑でとれたブドウを食べたり、シャーイ・マ・ナナを飲んだり、かわいい農家の赤ちゃんと出会ったり、のんびりした時間が流れた。5時頃に収穫を終え、いつものように道具を片づけてバスへ移動した。遠くにイスラエルの入植の建物が見えた。オリーブ畑、ブドウ、オレンジの木、子ども達。そういった人びとの暮らしの中に虐殺、入植の現実がある。信じられないことだけど、この風景を忘れないようにしようと心に誓った。

家に戻り、おいしいビーフシチューをいただき、畑でもらったミントの葉でシャーイ・

マ・ナナを作ってみた。食事の後、親戚の子どもたちと折り紙でツルや飛行機を折って遊んだ。パレスチナの太鼓の名手である親戚のおじさんから、太鼓のたたき方を習ったが難しかった。その後、他の二人はポリティカル・カフェに出かけたが、私はそのまま家で過ごした。(高橋)

(写真 農家の女の子、夕暮れ時の畑—オリーブの木、オレンジの木、ブドウ畑の後ろに入植の建物が見える)



【10月24日 プログラム7日目】

オリーブ収穫、United in Struggle against Israeli Colonialism, Occupation, and Racism

オリーブの収穫最終日のプログラム7日目は、普段は3グループに分かれて行動しているJAIの今回のプログラムの参加者全員が、一度に同じ畑に集まり、収穫。100人以上が一同に返すので、オリーブはすぐに摘み終わった。



午後は、Alternative Information Café 主催の【United in Struggle



against Israeli Colonialism, Occupation, and Racism】という会議が行われ、オリーブ収穫プログラムの中からも興味がある人たちは出席した。会議は、世界中からこの会議のためにパレスチナを訪れた研究者や、ジャーナリスト、またパレスチナに滞在しているボランティアなど、300を越える人が参加していた。その中の後援の一つは、壁の

外のイスラエル側で雇われて働くパレスチナ人の実態についての報告もあった。

土地が限られ、産業もままならないウェストバンクからは、多くの“出稼ぎ”がイスラエル側で働く。彼らは主に、建設現場かゴミ収集をする。賃金は非情に安く、1日10時間働いて2000円が平均である。また、彼らは労働許可は持っても居住はしていないので、毎日、壁にあるチェックポイントを通過して仕事に出かけなければならない。朝、4時起床、5時からチェックポイントに並び、6時にチェックポイントが開く。たくさんの人が出稼ぎに行くためチェックポイントは込み合う上、なかなかイスラエル兵が通してくれない。そのため壁の向こう側に出られるのは大体8時前後で、そこから夜6時まで働き続ける。またチェックポイントに並び、家に帰れるのは10時を過ぎてしまう。へとへとで家族ともまともに会話も出来ないまま眠りに付きそしてまた4時に起きる。そういった生活をしないとまともに食べていけないのが現状であり、また保険や安全もきちんと考慮されていない、まさに奴隷のような状態であることが、いくつかの統計と共に発表された。中には、工事現場での事故で指を失った作業員の写真なども紹介された。



会議の合間に、ウェストバンク内のベサフル YMCA の職員であり、今回のオリーブ収穫プログラムを主催した JAI の理事である、Nidal Abu Zuluf さんにお会いしてこれからの日本の YMCA とパレスチナの YMCA についてのお話をする事も出来た。(石原)

【10月25日 プログラム8日目（最終日）】

東エルサレム YMCA 訪問、Farewell Ceremony

プログラム最終日は、自由行動。他のメンバーはエルサレムの旧市街や死海に行ったが、

私たちは在日本韓国 YMCA と交流のある東エルサレム YMCA を訪問した。ベツレヘムを走るタクシーはエルサレムへ出ることができないので、分断壁まで行き、徒歩で checkpoint を通過した後、再びタクシーに乗ることになる。どちらの分断壁の近くにも、客を待つタクシーや売店が集まっていた。

タクシーを乗り継ぎ、東エルサレム Y に到着。プログラムの自由行動の日程が変更となり、休日の訪問となってしまったが、スタッフのミッシェルが出勤してくれ、案内してく



れた。かつてはホテルを運営していた東エルサレム Y だが、プログラムの運営費捻出のためにホテルを貸し出したとのことだった。よって外側から見た東エルサレム Y の印象は、小さなビルというものだった。しかし中に入ってみるとスポーツジム、卓球、プール、バレエスタジオ、ホール、職員のカフェテリアなど、素晴らしい施設がそろっており驚いた。ミッシェルは施設の説明を丁寧にしてくれて、彼のパレスチナ子どもへの教育に対する熱意が伝わってきた。東エルサレムにはホール、プールといった施設がほとんどないため、東エルサレムの人々のほとんどは東エルサレム Y の施設を利用するという。そのため、貧しい子ども達を含め多くの子ども達にプログラムに参加してもらいたいと考える東エルサレム Y は、参加費を安くするなどの挑戦をしているという。

東エルサレム Y を人びとの「第二の家」に、という彼らの思想が実践されていると考えた。またミッシェルはパレスチナ問題をどう考えていくべきか、ということを話してくれた。彼はパレスチナ問題がイスラエル対パレスチナといった政治的な議論で捉えられがちなことを批判した（それは何十年も前から言われている自明なことであるから）。そして、パレスチナのより良い明日のためには、パレスチナの人々自身がこの地で一体何が起きているのかということを考える力を身につけるべきだという。そして、そのために子どもの教育が重要だと話してくれた。ミッシェルの話から、東エルサレム Y の思想と実践の情熱に触れることができ、日本に戻ってから自分に何ができるかを考えたいと思った。



ミッシェルと別れた後、少しだけエルサレムを歩いてお土産を購入し、ベツレヘムにタクシーで戻り（イスラエルから乗る際には乗り換えは不要）、ホームステイ先の親戚の女の子 Loreen の 8 歳の誕生日会に行った。親戚の子ども達が作ったケーキを食べて、みんなで折り紙をして遊んだ。夜はプログラムの Farewell Ceremony があり、農家を

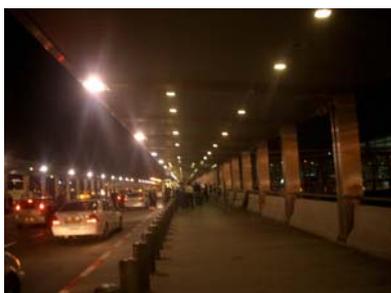


題材にしたパレスチナの伝統的なダンス、音楽演奏を鑑賞。そこに韓国からの参加者によるパレスチナの少年を歌ったラップが披露されとても盛り上がった。これでプログラムが終わるかと思うと寂しくなった。(高橋)

(写真上から:ベツレヘム側の checkpoint 前の分断壁、東エルサレム YMCA の入り口、Farewell Ceremony のダンス)

【10月26日～27日 帰国】

テルアビブ～ウィーン～日本、解散



10月26日、24時ごろ、荷物を詰めて手配したタクシーが来るのを待つ。午前1時40分ごろにタクシーが到着し、乗る。私たち3人と、他に2人も一緒のタクシーに乗りテルアビブ空港に向かった。途中、イスラエル軍のゲートを通ったが特に問題はなかった。ベツレヘムを後にし、イスラエルへ入った。午前3時、ベン・グリオン空港到着。

空港内を少しだけ迷ったあと、3時半から出国のチェックを受ける。滞在中何をしたか、どこにいたか、何か買ったか、誰かに会ったか、など質問攻めに合う。パスポートも隅々までチェックされる。このチェックが終わったら今度は持ち物のチェックに入る。トランクを開け、隅々まで検査される。若干冷々とするところである(見つかったらまずいものが入っていたので)。それが終わりようやく帰りのオーストリア航空のカウンターに行ける。トランクを預け、航空チケットをもらう。その後、再び検査は続く。今度は手持ちの持ち物の検査である。手持ちのバッグも隅々まで見られる。貨幣や電子辞書など、小物も出さなくてはならない。職員が水色の棒の様なものを用い、電子機器類に擦りつけている。「それは何か」と問うと眉間に皺を寄せて「教えられない」と言われた。

午前5時、1時間半の厳重な検査を終えて終了。後は飛行機(OS860便)の出発を待つだけである。午前6時までお店でお土産を買い、搭乗開始。約3時間のフライトでウィーンに到着。ウィーンで3時間程、ウィーン発成田着の便(OS051便)を待つ。疲労の色がうかがえる。現地時間14時頃、搭乗の検査を受け出発。この際、テルアビブ空港で購入したアラクを没収される(テルアビブ空港ではウィーン経由で持って帰れると言われた)。飛行機の中では特にする事も無く、映画を見るか寝るか、だった。

日本時間10月27日午前10時ごろ、成田空港に到着。入国審査がとても早く感じられた。当分の間、日本に帰って来たという実感が持てなかった。全ての検査を終え、到着ロビーで私たちは解散した。外に出ると、パレスチナの暖かな日差しはもうなく、肌寒い風が吹いていた。(斉藤)



(写真上から:ベン・グリオン空港の出発ロビー入口付近、ベン・グリオン空港のパネル)

◆参加者感想文

My Story to Palestine

石原紗和子

YMCA の世界に広がる大きなネットワークをここまで強く感じ、そして信じることは今まで無かった。2年前に、インドネシアのジョクジャカルタでのワークキャンプに、千葉YMCA のボランティアリーダーとして参加させてもらい、その報告会として、2007年日本YMCA 大会に参加し、そこで初めてパレスチナ人と出会った。パレスチナからゲストとして迎えられていたナダールさんの簡単な通訳として一緒に時を過ごし、パレスチナの話聞いた。大会の最終日、3日間という短い期間ではあったが、国を越えた、普通では出会えない人との出会いに感謝し”see you again in the future!”と別れを告げた。そうすると「私たちはもう会うことはないと思うよ。」そう、ナダールさんから返ってきた。イスラエルに占領され、自由に国外に出ることが出来ない状況のパレスチナへ帰っていくナダールさん。今回のようなチャンスはなかなかないし、遠く離れたそんな難しい土地に、日本から行く人もそういない。だから「僕のさよならは、一生さよならなんだよ」そう笑いながら続けた。

驚いてなんて言ったらいいかわからなくなった。悲しくもなった。でも、なんの保証も予定も無いけれど、「じゃあ私が会いに行くよ！」そう、意地を張った。

チャンスが巡ってきたのはそれから2年後。参加理由はひとつ、「約束を守るため」。

人との出会いが私の世界を広げてくれる。そしてYMCA でボランティアを始めてから3年、YMCA の世界中に広がるネットワーク、solidarity、そして隣人愛にいつも迎え入れてもらい、世界のどこでだれとでも、「YMCA だから」という理由ですぐに仲間になった。

今回のオリーブピッキングプログラムの目的も、そのsolidarity (団結・共有・連帯) を、世界で孤立するパレスチナと、日本を含むたくさんの国との間で結び、高めることだった。

10日間のプログラムを通して、政治や宗教が深く絡み合った問題の根本を知ろうと、たくさん要素を学び、聞き、見た。しかし、パレスチナとイスラエル、アラブ人とユダヤ人の抱える問題は、理解するのも、解決するのも容易ではない。10日間で、たくさん情報を一気に得ることが出来た。そして問題の解決のために、プログラムの参加者一人一人が起こすべき行動、伝えるべきことは、本当にたくさんあると思う。その中でも、私は「人と出逢って得たもの」が、自分がこのプログラムに参加したことの意味だったのではないかと思う。

「Sawa」という私の名前は、アラビア語で「together」という意味だと、パレスチナ人と出逢うたびに言われた。良い名前だねとほめてもらえて、そして誰からもすぐ覚えてもらえたことが、パレスチナの人々との距離を近く、深く出来たことの要因かもしれないと思った。お父さん、お母さんありがとう。笑

ヤサールという26歳のJAIをお手伝いする青年に出逢った。ベツレヘムの壁の近くで生まれ育った彼はいつも明るく笑顔で、オリーブピッキングのプログラムの中心人物の一人であり、ベツレヘムの人々全員と友達なのではというくらい友人が多く、そしてみんなから愛されていた。そんな彼は、自分の人生を諦めていた。

“I’m dreaming to dream” いつか夢見ることが出来る日が来ることを夢見ている。ヤサ



ールはそういうと悲しそうに満面の笑みを浮かべた。私はこの表情が頭にこびりついて離れない。壁の中の世界では、壁の外に出る権利も、十分な仕事をするこも、平和に暮らすこも出来ない。

「海外に行きたい、〇〇になりたい、家族と平和に暮らしたい」そんな誰でも考えるような将来の夢を持ってない生活を、彼は26年間おくってきた。夢を持つこが出来ない。だからいつか夢を持って、自分の人生を謳歌出来るこに夢を見ていると言う。

私は、海外で活躍したい、貧困を無くしたい、世界中の子どもを笑顔にしたい、いつもそう思っているんなこにチャレンジして、勉強もしてきた。YMCAはその国際的に広がるネットワークに私を乗せ、私の夢を次々と現実のものにしてきてくれた。

なぜ彼の夢は叶わないのか。

昨日までニュースの中の世界のこが、パレスチナに友人が出来るこで、自分の問題になった。大好きな友達がなぜこんな目に遭わなければいけないのか、私に出来るこはなにか。

今回のJAIのオリーブピッキングプログラムの中で、繰り返し伝えられたのが「小さいこから始めるこが大切」というメッセージ。パレスチナ-イスラエル問題は、歴史が長く、問題も複雑で、10日間やそこら滞在しただけでは、なにも出来ない。自分がこの問題、現状を理解するだけで10日間が終わってしまった。それでも理解しきれないこがたくさん残った。

なにも出来ない自分に非常に腹が立った。

そんな時に、パレスチナ問題を取材していたクリスというオランダからの記者に出逢った。彼はオリーブピッキングのプログラムに同行しながら、プログラムについてや、パレスチナのあらゆる側面を取材していた。

ガザ、イスラエル、そしてウェストバンクも取材してきて、対立の両者側、またその間に立つNGOや政府など、あらゆる人の視点を写真に収めてきた彼が見るパレスチナ-イスラエル問題は非常に興味深かった。紛争を本当に解決するには、両方を見なければいけない、だから“you always have to be inside” そういつて、イスラエル兵に話しかけた。

イスラエル兵は、ヘブロン街の真ん中や、チェックポイントで武器を手に、パワーを誇示するこでパレスチナ人を押さえ、私たちに嫌悪感を抱かせていた。イスラエル兵を見るだけで“f**k soldiers”と怒りを露にするボランティアもたくさんいた。そんなイスラエル兵に話しかけるなどその時の私にとってはあり得ないこだった。

でも、話してみると、その一人の兵士はごく普通の18歳の少年だった。笑顔で答えてくれて、私にどこから来たのか聞き、クリスのカメラがかっこいいと言った。そして、自分の「兵士」という仕事が好きではないと言った。

いつか日本に行ってみたくいつイスラエル兵の少年を、どう憎めばいいのかわからなくなった。

問題は思っていた以上に複雑で、知れば知るほどなにか正しくて、だれが、なにか悪いのかわからなくなった。少なくとも国民全員が2年間の徴兵を義務づけられている状況で育ったイスラエルの少年兵一人を憎むこになんの意味もない気がした。

他にも、たくさん子どもや、同年代の若者たち、そしてパレスチナの土地をこよなく



愛する人たちに出逢った。

昨日まで遠いどこかで起こっていた紛争が、今は、自分の名前を呼んでくれて、一緒に笑って話して一緒に時を過ごした友達に降り掛かっている紛争へと変わった。急に私もその紛争に関わる一員になったような気がした。もちろん、当事者でもなく、すぐに日本に帰ってきてしまうが、今、この状況、問題を知った、関わった一人の人間として、昨日までのなにも知らなかった自分には戻れない。

国際問題のボランティアをしていていつも感じる壁は、問題が大き過ぎて、私一人ですらうにか変えられるものではない。やって意味があるのか。私一人では小さすぎると感じてしまう。

でも、だから何もやらなくていいのか。友達が夢も見られず苦しんで生きていくのを、見て見ぬ振りには出来ない。

YMCA を通して、私はたくさんのお逢いをもたらした。世界中の人と、YMCA だからという理由ですぐに友達になれた。この世界中に広がるネットワークと助け合い、そして solidarity (団結・共有・連帯) は、必ずこのパレスチナ-イスラエルの状況を変えることが出来ると私は強く思う。

まずは、知ること、知らせること。

そのためには、私は、自分の見たこと、感じたこと、思うことを出来るだけ多くの人にずっと伝え続けていきたい。そして、もっと多くの当事者たち (パレスチナ-イスラエルの人々) も直接来て話して伝えて欲しい。

そうしていくべきだと思う。

長い歴史から見たら、こんな活動は小さいことかもしれないが、どんな大きな問題も、小さいことから始めることが大切だと思う。

旅を終えて

齊藤大喜

テルアビブ空港に到着して入国審査を受ける際、何処か異様な空気を感じた。それがイスラエルだからなのか、それとも近代的な空港と自分のイメージがかけ離れていたからなのか分からないが、とにかく今まで海外で感じた事が無い様な雰囲気があった。入国審査では、上手い事を言って特に時間もかけずに済ませた。これは幸運と言って良いのだろうか。

パレスチナの街を歩くと、ほぼ全ての建物が石で出来ている。まさに「中東」というイメージそのものである。食事もどれも美味しかった。毎日、オリーブを食べる事が出来て、オリーブが好きな私としては非常に嬉しかった。もちろん、パレスチナのビール (タイベ・ビール) と地酒 (アラク) も少々嗜んだ。

現地の人々は皆優しい。とにかく外国人に対して優しいのである。これは私が滞在したベツレヘムが国際的に訪問者が多く訪れる場所だからなのだろうか。挨拶をすれば必ず挨拶を返してくれる。そして街を歩いていけば必ずどこかで欧米人に会うのである。こんなにも欧米から人が来ているとは思ってもいなかった。

私が 1 番印象に残っているのは聖誕教会である。イエス・キリストが生まれたとされているその場所はパレスチナ自治区にあり、常に多くの旅行客で賑わっていた。「ここは本当にパレスチナなのか？」と思える程の観光名所だった。「パレスチナ」と聞くとどうも「危険な場所」や「紛争地帯」というイメージが頭に浮かぶ。これは間違いではないだろうが、

どうも日本のメディアが取り上げているものとかかなり違う、といった印象がある。実際、私は「不安」は感じて「危険」は感じなかった。もちろん時と場合、状況にもよるだろうが、少なくとも身の回りで「命に関わるような危険」は起きていない。この「パレスチナ=超危険地帯」というバイアスがかかる原因は恐らくメディアの報道にあるのだろう。日本のメディアはパレスチナ、特にガザの報道を多く取り上げるからである。ガザに関してはとても危険な場所だと断言出来る。生半可な気持ちで行くような場所ではない。私が滞在したベツレヘムは、極端に言ってしまうえばガザとは正反対の場所であった。日本のメディアが報じている様な「紛争地帯」を（もちろん場所によっては別だが）目にするというわけでもなく、むしろ楽しそうに日々を暮らす現地の人々の姿がそこにはあった。こういう「楽しそうに暮らす人々」を見て、一方通行だったバイアスを少しは振り払う事が出来た様に思える。

紛争が起きる原因は大きく分けて「領土」「宗教」「人種」「資源」の4つだと言われているが、パレスチナ・イスラエル問題にはもう1つの特殊な問題が絡んでいる、と個人的に強く思っている。それは「敵意という何十年にも渡る集団心理」である。それもかなり深くまで根付いている。パレスチナ側にいる国際ボランティアは「イスラエルの製品を買うのはやめましょう」や「ボイコット・イスラエル」などと叫んでいたが、私はこれをすんなりと受け入れる事は出来なかった。この「敵意」が客観性を失わせているのではないだろうか。しかも厄介な事に、この「イスラエルに対する敵意」自体が彼ら（パレスチナ人）のアイデンティティとなり、親から子へ受け継がれてしまっている様に思える（デモなどで子供がイスラエル兵に対して遊び感覚で石を投げる、など）。これこそが紛争を長引かせる1番の要因ではないのだろうか。

残念な事に、イスラエルからの観点に立ってここに何かを書く事が出来ない。イスラエルには足を踏み入れる程度しか行かなかったからだ。もちろん、エルサレムは素晴らしく綺麗で、イスラエル側の車の運転は何となく怖く、ネタニヤフ政権は極右で現在もパレスチナに対する入植続け、穏健派のアッバス大統領は来年1月の大統領選に出馬しないかもしれない、という事は言える。是非とも今度はイスラエル側に滞在してみたいし、むしろ行かなくてはならないと思っている。

さて、上に書いた聖誕教会も印象に残っているが、目に焼き付いている景色は他にもある。それは夕焼けである。ビルが立ち並ぶ日本ではあまり目にする事が無い様な、とても綺麗な夕焼けに何度も出会った。この夕焼けの空に、美しいコーランが響き渡る。私は茫然と立ち尽くしてしまった。今まで経験した事も無い様な景色に何度も酔いしれた。写真を撮るのも忘れる程であった。この写真は我に振り返った写真である。



今回、このような貴重な体験をするにあたり、日本 YMCA 同盟、在日本韓国 YMCA、東京 YMCA を始めとする関係者各位、ならびに同行して下さった高橋さん、そして友人である石原さんに心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

パレスチナで、そしてアジアで。

高橋 梓（在日本韓国 YMCA）

コーランと教会の鐘が鳴り響く、ベツレヘムの古い街並み。あの街で、オリーブ収穫プログラムのスタッフやボランティア、そしてホームステイをしたパレスチナの家族と出会った。しかし、町を見渡せばパレスチナ人の住居を示す黒いタンク¹があり、車で移動すると分断壁とチェックポイントに直面した。

エルサレムは、西エルサレムと、パレスチナ自治地区の東エルサレムとでは全く風景が違い、西はニューヨークにあるような公園やビルが並ぶのに対し、東には崩れかけた石造りの建物が並んでいた。

ヘブロンでは、入植によってパレスチナの人々のマーケットが金網で覆われていた。その金網にハンガーを掛けて店の洋服が売られていたのを見て、驚いた。



そして、今回のプログラムの大半を過ごしたオリーブ畑では、農家の人々や子どもたちと出会った。広く静かな畑で、ミントのお茶やご飯をごちそうになりながら、一緒に収穫をした。だが、私たちが静かな——表面的なものにすぎなかったのかもしれない——時間を過ごした畑は、それぞれ以下のような一面も持っていた。エルサレムに向かうバイパス道路の下に位置する畑はチェックポイントで分断され自由に行き来できず、イスラエルの入植者の建物が遠くに見えた畑ではイスラ

エル軍による虐殺が語られ、分断壁に密接する畑では農家の数がどんどん減っていき今は自分の農家しか残っていないことが語られた。パレスチナの人々の生活。その隣にはいつもイスラエルの入植という現実がある。

これが数日間、私がパレスチナでオリーブ収穫のボランティアをし、パレスチナに身を置くことで出会った風景だ。オリーブ収穫ボランティアを通して、パレスチナでの生活を経験することで、入植という現実が彼らにとって日常となっていることに驚いた。それは、パレスチナ対イスラエルという単純なものではなく、移動（アパルトヘイト・ウォールの存在）と所有（オリーブ畑破壊）が脅かされることで、じわじわとパレスチナ人であるという文化が脅かされている、ということではないか、と思う。

一つ、移動のこと。それは出会ったホームステイ先のお父さんやお母さんと生活の中で交わした会話から感じた。例えば、ベツレヘムには外からの郵便物が届きにくいとか、エルサレムに行くための許可を取った、などという言葉。それは、少し歩けばショッピングセンターや公園に行くことができちゃう、日本の、そして東京に暮らす私の生活とはかけ離れており、驚きだった。

もう一つ、移動のこと。プログラムが終わった後の深夜、空港に向かったタクシーでの出来事だ。チェックポイントを通過しやすくするために、タクシー運転手は大音量でヘブ

¹ パレスチナで見かけた黒いタンクは、水の供給が十分に行われないパレスチナ家庭が、水をためているのに使われている貯水タンクである。これらのタンクはイスラエルの軍事行動によって破壊され、水がないままの生活を余儀なくされる例もあり、海外、イスラエル人による募金活動が行われている。

ライ語の音楽をかけたのだ。おかげで無事チェックポイントを通過することができた。だが、彼が音楽を止めた時に再び訪れた深夜の静寂と、テルアビブ空港で出国するためにはパレスチナにいたことを話してはいけなかったあの時間が忘れられない。外国人として感じた圧迫。パレスチナ人にとってはさらに強い圧迫なのではないか。

パレスチナで文化が脅かされている。日常で、じわじわと。

また、朝鮮語を大学で専攻し、在日本韓国 YMCA でアルバイトをしていた縁でこのプログラムに参加した私自身にとって、植民の日常を生きるパレスチナの人々に出会ったことは、アジアの人々と出会いなおすことだと思ったし、そうする必要があると思う。

パレスチナのオリーブ畑の農家が減っていることや、畑での虐殺を聞いた時、私は韓国・^{ピョンテク}平澤にあった^{テチュリ}大秋里という村を思い出した²。2003年、韓国における米軍基地拡張・再編は、韓国・米国間で合意された。これまで韓国北部に駐留した米軍が拡張・再編したのは、対テロ戦争により米軍が世界に軍事力を持つ必要に迫られたからだった。より安全に迅速に派兵を行うために、これまでの基地より南へ基地を再編することが計画された。その一つとして選ばれたのが、韓国の平澤という地域。基地建設に伴い、この地の農村「テチュリ」の人々は立ち退きを迫られる。この村を撮ったドキュメンタリーを見ると、村の人々の強い拒否が映し出されている。田んぼを自分の子どものように可愛がってきた働き者で寡黙なおじいさんは、土地を離れることは「生きているとは思えない」と立ち退きを強く拒否した。そして立ち退き要求への怒りから機動隊に掴みかかった。寡黙なおじいさんの、畑が奪われることへの尋常ならざる怒り。パレスチナのオリーブ畑の農民、彼らの土地への思いとそれが否定される現実、韓国の農民達の土地・農業への愛、そしてそれを奪われる危機と重なり合う。

また、平澤ではその後数年にわたり村の農民達の抵抗と立ち退き要求が対立することになるのだが、農民に立ち退きを迫るのは韓国軍による機動隊であるという問題がある。おじいさんに掴みかかれて、また農家のおばあさんが嘆く前で、目にとまどいの色をうつす若い韓国の機動隊員もいた。このとまどいの色から考えなければならないのは、彼ら機動隊への憎しみではなく、彼らをそう行動させる力が背景にある——この場合「対テロ戦争」による米軍再編——と考える必要があるのではないか。それは、パレスチナ問題の場合、それが単なる宗教対立と考えるのではなく、パレスチナ問題を発生させた原因——イギリスのいわゆる「三枚舌外交」³——から見る必要があるし、イスラエル兵や入植者の暴力がなぜ起きてきたのかを問う必要がある。パレスチナ人の文化がなぜ抑圧されるのか、パレスチナ人とイスラエル人がなぜ出会えないか、話せないか。その背景にはイスラエル人とパレスチナ人の間に起きたこれまでの戦争、占領を通して発生した暴力がある。

問題自体に「なぜ？」と問いかけること。「なぜ？」と考えることこそが長期的な展望での紛争解決ではないかと思うし、その考える力をそれぞれの地域——パレスチナで、そしてアジアで——で生かしていくことが、「よりよい明日を作る」⁴ことになる。パレスチナに行き、こう考えるようになった。

以上が、私がオリーブ収穫のボランティアをしながら考えたことだ。

² 中井信介『テチュリの灯火よ 基地に揺れる農民とある映画監督の記録』(25分、RKB毎日放送製作、2006年)

³ オスマントルコからパレスチナの独立を約束したフセイン・マクマホン協定(1915年)、フランス・ロシア・イギリスによる中東地域分割の協議であるサイクス＝ピコ協定(1916年)、ユダヤ人の国家建設を支持したバルフォア宣言(1917年)が同時に存在した。

⁴ 今回東エルサレム YMCA を訪問した際に、スタッフのミッシェルが「よりよい明日を作る」ためにパレスチナ人の子どもたちに考える力を与える教育をしたい、と言っていた発言から。

パレスチナの人々に出会うことで、移動の自由、畑を失う危機、そして文化を奪われる危機の重さを感じた。そして、自分が立っているアジアではどうなんだろう？と考え直す必要を感じた。そして、現実「なぜ？」と問いかけ、背景に働き合う力を見つめるべきではないかと思う。今後アジアの問題を考える時、今度はパレスチナの人々の顔を想起することになるだろうし、そうする必要はあると思っている。

とはいえ、このオリーブ収穫ボランティアで危険なのは、外国人としてパレスチナ人と話ただけで、さらにイスラエル人（あるいは兵士）と話ただけで、パレスチナ問題の内側に入り込んで理解した気になってしまうことであると思う。私／たちがパレスチナの人々と話すことができたのは、私／たちが外国人だからだ。問題なのは、パレスチナ人の文化がなぜ抑圧されるのか、パレスチナ人とイスラエル人がなぜ出会えないか、話せないか、ということ。その原因は、イスラエル人とパレスチナ人の間に起きたこれまでの戦争、占領を通して発生した暴力だ。だから話せないし、出会えない。それなのに、外国人としてパレスチナに行ってパレスチナ人・イスラエル人と出会っただけで、パレスチナとイスラエルの両側に立ったつもりになるのは、非常に危険だと思う。これは他の地域へのボランティア活動でも気をつけなければならない点ではないだろうか。自戒も込めて、ここに書いておく。

またこのプログラムに参加した者として、日本からもっと多くの人に参加して欲しいと思う。なぜなら、政治家や国連職員ではない私達の多くは、壁を壊すことは無理でも、壁を壊しても解決できない人と人との間の問題を「なぜ？」と考えることによって長期的に解決できる可能性を秘めているからだ。その上で、オリーブ収穫プログラムを通してパレスチナの現状を世界に発信していこうとしている、JAI、AICの働きはとてもチャレンジングだと思う。

しかし、単純な興味だけでパレスチナに行くのは大変危険だと思う。私たちが滞在したベツレヘムという地域は、外国人ボランティアが住み、JAIやAICの活動をしている独特な雰囲気を持っている。そこに、ただ紛争地というイメージを持っただけで行くと、「意外と安全だ」、あるいはイスラエル対パレスチナという思考に陥りがちだ。それは、このボランティアの意味から外れる危険性があるし、そういう人が他の人に「意外と安全」と伝えることで、パレスチナの入植の現実がゆがんだ形で理解される恐れがある。大事なものは、日常のように見えるところに、どれ位パレスチナ人の危機があるのか、それを感じるかどうかだと思う。参加者は、それなりの覚悟を持って参加すべきだと思う（これも、自戒を込めて）。

最後になりましたが、また国際的連帯によってオリーブ畑を守ろうとしている、本プログラムの主催者 Joint Advocacy Initiative、Alternative Tourism Group の現地スタッフの皆さん、パレスチナの子どもたちに様々な教育プログラムを提供している東エルサレム YMCA のスタッフ・ミッシェルさんに敬意を示します。そして、今回パレスチナに行く機会与えて下さり、同時に現地へ赴いた私たちに暖かく見守って下さった在日本韓国 YMCA 田附和久さんと日本 YMCA 同盟の横山由利亜さんに心より感謝します。またパレスチナを訪れた在日本韓国 YMCA 関係者として、今後パレスチナに関わるプログラムに影ながら協力していければと思っています。

